

長岡第七小学校区は、今里、野添、柴ノ里、一文橋など、小畑川と風呂川に挟まれた南北に長い区域です。この区域に所在している遺跡としては、長岡京跡をはじめ、今里遺跡、今里北ノ町遺跡などが知られています。今回は、そのうち今里北ノ町遺跡で見つかった木製の農耕具について紹介します。

今里北ノ町遺跡は、今里北ノ町から野添1・2丁目にかけての氾濫原に広がる弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、これまでに旧流路や溝などが確認されています。

乙訓休日応急診療所を建設する前の発掘調査で、蛇行する幅2〜3メートル、深さ0・4メートルほどの規模がある古墳時代からの溝が見つかり、その中から木製農耕具の破片が出土しました。

この農耕具は、ナスビを縦割りにしたような細長い平たい形の木製品で、刃先が二またに大きく分かれています。現存する部分の、長さ64センチ、幅7・7センチ、厚さ0・7センチほどの大きさで、やや大型品の部類に入ります。土を耕したり、すき返す作業に使われたようですが、薄い作りであることから、硬めの土の耕作には不向きであったと考えられます。

水田耕作が本格的に始まった弥生時代以来、様々な形をした農耕具が使用され、その中には現代の鍬や鋤のように大きく形を変えることなく使用され続けたものがあります。

ところが、ナスビ形をした農耕具は、古墳時

代に特有なものらしく、全国的に広く普及したようです。しかし、その後急速に衰退し、消滅したことが明らかにされています。

これは、農耕具としての役割を十分に発揮できなかった未完成品であったこと示しています。



▲ ナスビ形の木製農耕具（左）とその出土状況